

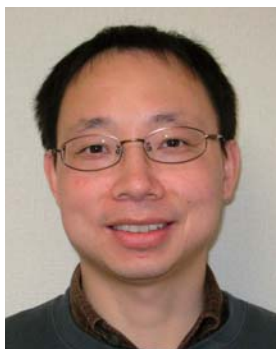
東海村から故郷の交通への感想

郝 汀

Ting Hao

極限環境場物質探索グループ

Research Group for Material Design and Experiments under Extreme Conditions



2007年春から原子力機構のポスドクとしての東海村勤務が決まりました。それまでの日本での生活を通して、村は人家が少なく閑散としている所であるといったイメージを持っていましたが、いざ東海村に来てみると、駅は大きくて立派だし、家やお店も沢山並んでいて、居住人口が3万人以上であることも分かり、自分の抱いていた村のイメージと全然違うので戸惑いつつも、生活しやすそうな環境が整っていたので安心しました。のちに、このような村が特

殊なケースであることを知りましたが、いずれにしても、広い自動車道や歩道等もよく整備されていて、日本はどこでもほぼ均等に発展しているんだなあと感じ、私の故郷も更に発展していくことを期待しました。

私の故郷は中国の内陸の陝西省漢中市です。歴史上の漢中は楚漢戦争時代の霸王項羽、漢王劉邦や、三国時代の諸葛孔明、劉備、曹操などの有名な人物が活躍したところです。漢中は西安（陝西省）と成都（四川省）の間に位置し、周りには大きな山に完全に包囲されていて、小さい“漢中盆地”が形成されており、気候は温暖湿潤、物産が豊富で、景色も美しく、パンダ、トキなどの希少動物が生存しているところです。しかし、この盆地による交通環境整備の不備および住民の“盆地意識”のため、経済は開発途上の状況となっています。特に交通の不備が深刻でした。

子供時代に、漢中は山の中の小さい世界だとぼんやり感じはじめ、「外の世界を一度見に行きたい」という感情が事あるごとに湧いてきました。そのため、大学の入試は漢中の大学を避けて、北京や西安などの大学を選んで、結局、同陝西省の西安の大学に進学しました。漢中から西安まで地図上の直線距離はおおよそ200km程度であるにも関わらず、当時の普通電車路線はかなり遠回りで約3倍の600km近く、移動に12時間もの時間を費やす必要がありました。一応、漢中—西安間のバスもあったのですが、長い山道で約9時間かかることと、たびたび交通事故が発生するため、電車を利用する人が多かったです。電車は毎日片道一本ずつしかなかったので、チケットの確保が大変で、電車の中はいつでも満席状態でした。また、12時間ほぼずっと座ったままである必要があり、とにかく疲れました。このため、大学時代の春・夏休みに近づくと、実家—大学の間の往復に対しては、楽しみでもあり、不安でもありました。この微妙な感覚は、体験のない皆さんは想像できないかもしれませんが…。

やっと2007年秋、「漢中—西安までの高速道路が開通して、3時間内に西安に到着できるようになった」とのいいニュースが入ってきました。また、今年から漢中を経由する成都—西安間の新しい高速鉄道が着工され、4年後、電車で漢中から西安までは1時間以内に到達可能になるとのことで、故郷の遅れた交通事情への徹底的な改善が期待できるようになりました。

今は先端基礎研究センターで超重力場を用いて新規物質の創製や新規物性の発現に関する研究を行っています。研究遂行上のニーズから、いろいろな研究者と交流してきましたが、エネルギー問題や地球温暖化に伴う環境問題を気にかけている人が多いことに気がきました。研究に携わっている私も、やっぱり化石燃料ではなく、クリーンな太陽エネルギーや原子力のような地球に優しいエネルギーの利用に大きな期待を持っています。故郷の交通も、環境を配慮しながら、更に発展してほしいと思います。